

# CPARヘルスチェックマニュアル

## 内容

[概要](#)

[背景説明](#)

[ネットワークへの影響](#)

[アラーム](#)

[ヘルスチェック](#)

## 概要

このドキュメントでは、メンテナンスウィンドウの実行前と実行後にCisco Prime Access Registrar(CPAR)の状態を確認する方法について説明します。

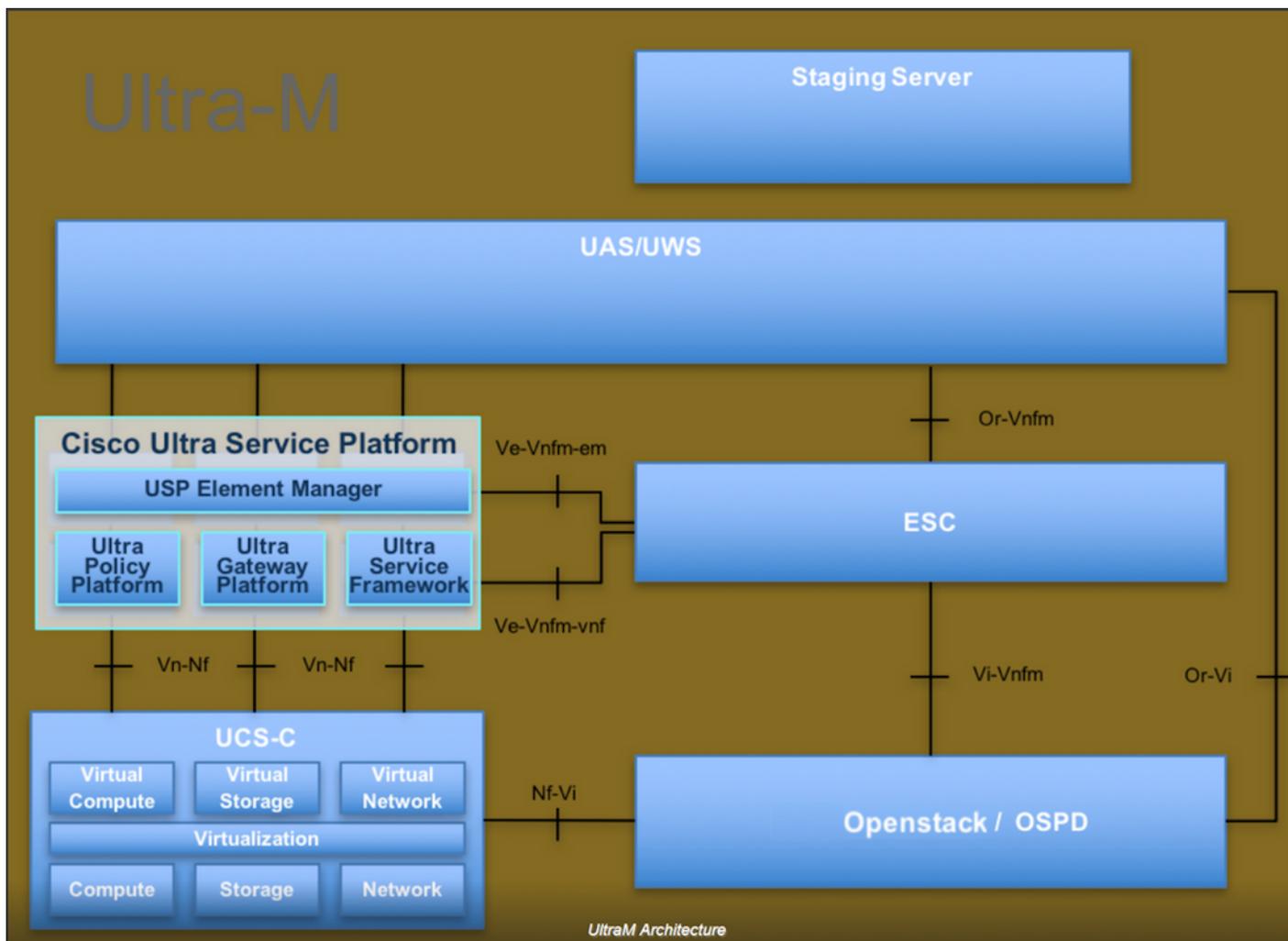
この手順は、ESCがCPARを管理せず、Openstackに導入されたVMに直接インストールされるNEWTONバージョンを使用するOpenstack環境に適用されます。

## 背景説明

Ultra-Mは、VNFの導入を簡素化するために設計された、パッケージ化および検証済みの仮想化モジュールコアソリューションです。OpenStackは、Ultra-M向けの仮想化インフラストラクチャマネージャ(VIM)で、次のノードタイプで構成されています。

- 計算
- オブジェクトストレージディスク – コンピューティング (OSD – コンピューティング)
- コントローラ
- OpenStackプラットフォーム – Director(OSPD)

Ultra-Mのアーキテクチャと関連するコンポーネントを次の図に示します。



このドキュメントは、Cisco Ultra-Mプラットフォームに精通しているシスコ担当者を対象としており、OpenStackおよびRedhat OSで実行する必要がある手順の詳細を説明しています。

注：このドキュメントの手順を定義するために、Ultra M 5.1.xリリースが検討されています。

## ネットワークへの影響

ネットワークまたはCPARサービスへの中断や干渉はありません。

## アラーム

この手順では、アラームはトリガーされません。

## ヘルスチェック

セキュアシェル(SSH)を使用してサーバに接続します。

アクティビティの前後でこれらの手順をすべて実行します。

ステップ1:OSレベルでコマンド/opt/CSCCOar/bin/arstatusを実行します。

```
[root@aaa04 ~]# /opt/CSCOar/bin/arstatus
Cisco Prime AR RADIUS server running      (pid: 24834)
Cisco Prime AR Server Agent running       (pid: 24821)
Cisco Prime AR MCD lock manager running   (pid: 24824)
Cisco Prime AR MCD server running        (pid: 24833)
Cisco Prime AR GUI running                (pid: 24836)
SNMP Master Agent running                 (pid: 24835)
[root@wscaaa04 ~]#
```

ステップ2:OSレベルでコマンド/opt/CSCOar/bin/aregcmdを実行し、管理者クレデンシャルを入力します。CPAr Healthが10のうち10で、CPAR CLIを終了していることを確認します。

```
[root@aaa02 logs]# /opt/CSCOar/bin/aregcmd
Cisco Prime Access Registrar 7.3.0.1 Configuration Utility
Copyright (C) 1995-2017 by Cisco Systems, Inc. All rights reserved.
Cluster:
User: admin
Passphrase:
Logging in to localhost
```

```
[ //localhost ]
LicenseInfo = PAR-NG-TPS 7.2(100TPS:)
              PAR-ADD-TPS 7.2(2000TPS:)
              PAR-RDDR-TRX 7.2()
              PAR-HSS 7.2()

Radius/
Administrators/
```

```
Server 'Radius' is Running, its health is 10 out of 10
```

```
--> exit
```

ステップ3 : コマンドnetstatを実行する | grep diameterとして、すべてのDRA接続が確立されていることを確認します。

次に示す出力は、Diameterリンクが想定される環境を対象としています。表示されるリンク数が少ない場合は、分析が必要なDRAからの切断を表します。

```
[root@aa02 logs]# netstat | grep diameter
tcp        0          0 aaa02.aaa.epc.:77  mp1.dra01.d:diameter ESTABLISHED
tcp        0          0 aaa02.aaa.epc.:36  tsa6.dra01:diameter ESTABLISHED
tcp        0          0 aaa02.aaa.epc.:47  mp2.dra01.d:diameter ESTABLISHED
tcp        0          0 aaa02.aaa.epc.:07  tsa5.dra01:diameter ESTABLISHED
tcp        0          0 aaa02.aaa.epc.:08  np2.dra01.d:diameter ESTABLISHED
```

ステップ4:TPSログに、CPARによって処理されている要求が表示されることを確認します。太字で強調表示されている値はTPSを表し、これらは注意が必要な値です。

TPSの値は1500を超えることはできません。

```
[root@aaa04 ~]# tail -f /opt/CSCOar/logs/tps-11-21-2017.csv
11-21-2017,23:57:35,263,0
11-21-2017,23:57:50,237,0
11-21-2017,23:58:05,237,0
11-21-2017,23:58:20,257,0
11-21-2017,23:58:35,254,0
```

```
11-21-2017,23:58:50,248,0
11-21-2017,23:59:05,272,0
11-21-2017,23:59:20,243,0
11-21-2017,23:59:35,244,0
11-21-2017,23:59:50,233,0
```

ステップ5: `name_radius_1_log`でエラーまたはアラームメッセージを検索します。

```
[root@aaa02 logs]# grep -E "error|alarm" name_radius_1_log
```

ステップ6: これは、CPARプロセスが使用するメモリ量を確認するコマンドです。

```
top | grep radius
```

```
[root@aaa02 ~]# top | grep radius
```

```
27008 root      20   0 20.228g 2.413g 11408 S 128.3  7.7  1165:41 radius
```

この強調表示された値は、次より小さい値である必要があります。7 Gb (アプリケーションレベルで許可される最大サイズ)。

ステップ7: ディスク使用率を確認するコマンドです。

```
df -h
```

```
[root@aaa02 ~]# df -h
```

Filesystem		Size	Used	Avail	Use%	Mounted on
/dev/mapper/vg_arucsvm51-lv_root	26G	21G	4.1G	84%	/	
tmpfs		1.9G	268K	1.9G	1%	/dev/shm
/dev/sda1		485M	37M	424M	8%	/boot
/dev/mapper/vg_arucsvm51-lv_home	23G	4.3G	17G	21%	/home	

この全体の値は、次の値より小さくする必要があります。80%以上の場合、不要なファイルを特定してクリーンアップします。

ステップ8: コアファイルが生成されていないことを確認します。

コアファイルは、CPARが例外を処理できない場合にアプリケーションがクラッシュした場合に生成され、この2つの場所で生成されます。

```
[root@aaa02 ~]# cd /cisco-ar/
```

```
[root@aaa02 ~]# cd /cisco-ar/bin
```

上記の2つの場所にコアファイルがない場合は、Cisco TACケースを発行して、このような例外の根本原因を特定し、デバッグ用にコアファイルを添付してください。